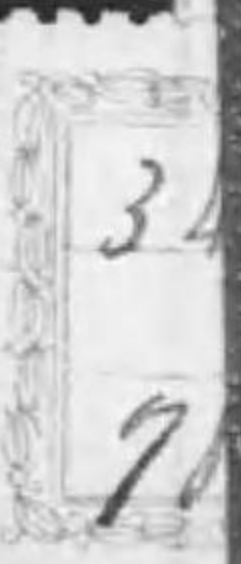


5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20

始



十
銭



新聞社編

特 251
336



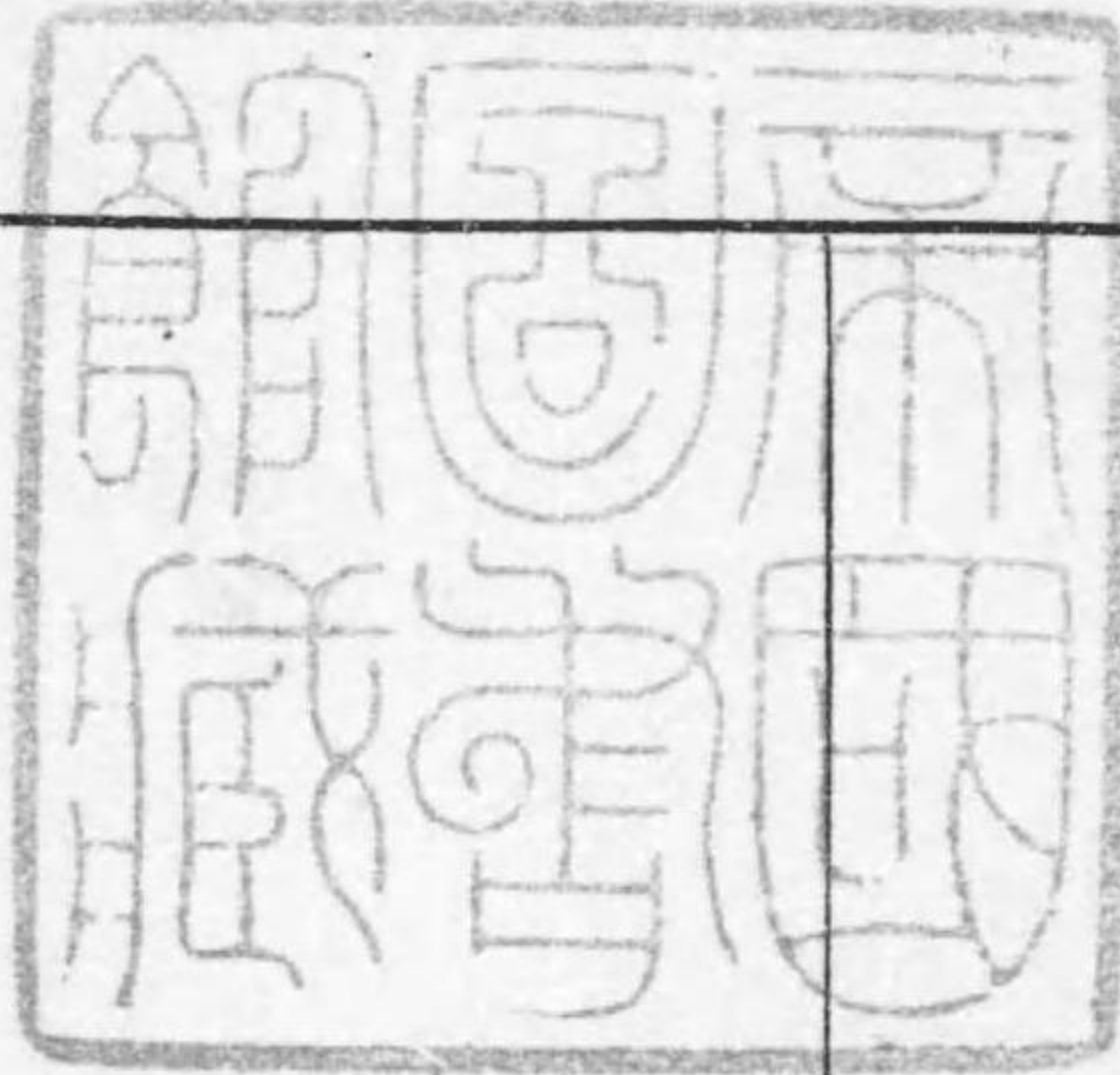
罪
を
裁
か
れ
る
人
々

サ
バ

— 法廷實話集 —

499

特251
336



國民新聞社編

罪を裁かれる人々

森田書房版



目次

- 一 甦る死美人……………(一)
大洗海岸の朝——切齒扼腕——犯人の自白——妾殺し
——花柳界育ち——男の愚痴——兩親の驚愕——養親
夫婦——死花は咲く
- 二 不在證明……………(三)
意外な陳述——刑事への報恩——刑事の證言——マダ
ムの登場——無罪の判決
- 三 夜櫻お小夜……………(三)
釋放の日——女工生活——男の秘密——女の意地——
吸血鬼——微笑む者
- 四 弱者同士……………(四)
ブローグ——女給の希望——女の心——幸から不幸へ

罪を裁かれる人々

國民新聞社編

甦る死美人

大洗海岸の朝

ほの／＼として、夜が明け初めて来た。磯節いそぶしで知られた茨城縣下大洗海岸おほらひかいがんのれい明である。
鏡のやうな水面すゐめんに、八月の太陽が赫々くわくくわくと照りつけると、金波銀波きんぱぎんぱが反映し
『えいせい』

と、港に急ぐ漁船が、この漁師街の好景氣を思はせる。眞帆片帆は沖に點々し、白砂青松に鷗が戯れて、漸く、赤い太陽が浮び上つたと見るや。

「たゝた、大變だーッ」

と、魂消た漁師の叫び。

「どうした、どうしたんだね」

「どうもかうもありあしねえ、死んでゐるんだ、人が……」

「また行倒れかろう、近頃はめつきり、死人が減つたと思つたに、世話を焼かせる奴ぢや」

附近にゐた漁師が、ぞろ／＼と集まつてくる。松林の中に、仰向くやうに、打倒れてゐる死人の顔を見て、漁師達は、どんぐりのやうな眼を割いた。

「別嬪ぢやないか、凄く美人だ」

「素人ぢやねえぞ、玄人の、いゝ年増だ」

虚空をつかんで悶死してゐるのは、近頃珍しい夜會鬻の女で、白粉焦けのした二十七、八の艶の女だつた。

(死ぬと醜くなるものだが、この佛さまは綺麗だ、まるで繪のやうだ)

漁師の誰もが、夜會鬻の女の死顔を眺めて、感嘆した。

「誰か、警察へ申上げて來ることだ、藝者のやうな、美しい女の死人だよ——」

漁師の八藏が、さう云ひながらかぶせてあつた夏羽織をはぎ取つて、あつと驚いた。

「みんな、これは只の佛さまぢやねえ。殺されてゐるぞ」

「えッ、人殺しだつて……」

「首に手拭ひが巻いてあるだ、絞め殺されたんだね」

「そら大變だ、警察の旦那を呼んでくべえ」

「觸つちやいけねえ、警察の旦那が來るまでは、そつとして置かなくちやいけねえぞ」

ワイ／＼群つてくる附近の男女を、二、三人の漁師が、聲からして制してゐる所へ、訴へによつて、警官數名が急行して來た。死體の檢視と、現場の檢證が行はれ間もなく、死美人の死體は、警察署へ運ばれた。

——大洗海岸に惹起された美人の殺害事件——

警察は、死美人の身許調査に對し、全機能を總動員して、活躍する。

切齒扼腕

四

所持品を調べたが、別段手懸りとなるやうなものはない。死美人の死體を前に、刑事達は腕を組んで思黙考してたが、

「それかね、首を絞めてあつた手拭ひと云ふのは……」

と、手に取上げた司法主任は

「ふむ、これは伊勢屋旅館の手拭ひだ、直ぐに番頭を呼んで見るんだね」

「は、電話を掛けませう」

一刑事が電話口へ飛んで行き、モシ／＼とやつてゐたが、間もなく、慌たゞしく伊勢屋旅館の番頭が飛んで來た。

「忙がしいのに御苦勞だが、この女の顔に、見覚えがあるかね」

「は、さうですか」

司法主任の言葉に、それへ近付いた番頭は、白布を取除かれた死體を見て

「ひやーッ、これは死人で！」

「逃げる奴があるか、この女が大洗海岸に殺されてゐたんだ。君の家の手拭があつたので、若しや、君の家のお客さんぢやないかと思つたんだが！」

「何とも申譯ありません。突然死人の顔を見たので、吃驚しましたんで……」

「さうか、もう一度シツカリ見て呉れ給へ」

「は」

番頭は、漸く冷靜になつて、死人の枕頭に進み、ヂーツと凝視してゐたが

「あッ、これは昨日泊つたお客さんだッ！」

と、頓狂な聲で――。

「えッ、矢張りお客さんか」

「へい、この女なら昨日のお晝すぎ、四十五、六の男のお客さんと宿を取りましたんで」

「うむ、その男だ、宿帳はあるか宿帳は？」

「合憎、帳場の方で」

番頭の言葉も、もどかしく、司法主任は數名の刑事と共に、伊勢屋旅館に向つた。宿帳には

東京市下谷區龍泉寺町一の三九

野口好榮
妻 奈美子

六

とあつた。

「野口と云ふお客さんは、どうしたかね」

「野口さんでございませうか、昨晚おそく、御出發になりましたが」

「發つた？」

「はい」

「一人で發つたかね」

「左様でございます。奥さまは驛で待つていらつしやるとかで、非常に忙しく御出發でした」

「しまつた！」

司法主任は、地たん駄踏んで口惜しがつた。

犯人の自白

その日の汽車で、二人の刑事が下谷區龍泉寺町の野口好榮宅に急行する。野口は外出先から、今

しがた、歸宅したばかりで、衣類を著換へてゐる最中だつた。

「野口好榮と云ふのはお前か」

ぬつと這入つて来るなり、出しぬけに呼びかけた二人の男を見て野口は不審さうに

「野口は私だが、ま前さん達は誰方だね、案内もなく他人の家へ上り込むなんて、お前達は物盜りかそれとも暴力團か」

「黙れ、われ／＼は物盜りでも、暴力團でもない。野口好榮に用があるんだ！」

「えッ、それでは、お前さん達は……」

「お察しの通り、警察の者だ。大洗海岸からすつと、追跡して來たんだ、逃げようたつて、逃がしはせんぞ、神妙に縛に就け！」

「……………」

サツと顔色變へると無言、刑事二人を突退けて、たつ／＼と玄關口へ飛出す野口の背後から、

「貴様逃げるかッ、ふふ、逃がしてなるものか、えいッ！」
と投げられた手練の捕縄

「あッ、しまつた！」

七

捕縄のために足を取られた野口は、バツタリ打倒れる。二刑事は折重なるやうにして「神妙にしろ」

と、野口に組みついた。

やがて、捕縄をかけられた野口は引立てられ

「恐れ入りました」

と、観念する。

本署へ連行の上、ぐつすり眠つてから、調室へ呼び出され

『大洗海岸で、女を殺した覚えがあるだらう。男らしく白状してしまへ、いゝか』

と、司法主任の取調べが開始された。野口は

『自分では誰にも知れぬつもりで殺害したのですが、悪の榮えた例はありません。私が悪かつたのです、何も彼も申上げることにはいたしません』

と、東京の野口とは打つて變つて従順しくなつてゐた。

「殺した女は、私が世話をしてゐる妾の奈美子でございます、二年程前に、藝妓をしてゐたのを落着いたのであります。私には妻と三人の子供がありますが、不圖遊んで花柳界で知り合つたの

が奈美子でした。

藝妓と云へば、お客の懷中を狙ひ、狐か狸のやうに男を欺すものとばかり考へてゐましたが、私が見た奈美子がかうした類の女と異り、藝妓中の異色ある女でした。そして、奈美子の口から更に、感動すべき事實を聞いたのです」

妾 殺 し

大洗海岸の山林中に、惨殺死體となつて現はれたのは、下谷區龍泉寺町野口好榮の妾奈美子と判明したが、警察へ連行された野口は、一切を観念して、妾殺しの事情をツブサに、物語つた。

……藝妓をしてゐた奈美子が、普通の藝妓と違つて、極めて眞面目であるし、殊にかうした社會に身を沈めさせた兩親を恨まず、月月五圓、十圓と送金して、兩親の手助けをしてゐると聞いた私は心から感激しました。

然も、彼女には二組の兩親があるのです。一組は生みの親であるし、一組は育ての親であります。生みの親は、彼女を生むと間もなく、生活に困るところから、現在の親——白河銀次郎夫婦に養女にやつたのです。

銀次郎夫婦の手で成人した奈美子は、小さい時から長唄、踊りなどのやうな藝事を仕込まれて来たが、銀次郎一家も、裕福でないところから、養女の奈美子を藝妓にすることにしたさうです。最初は千五百圓で、神奈川縣下の花柳界に住込んだが、娘を賣るやうな親と云ふものは仕方のないものです。

千五百圓の借金を背負はせて、苦勞の勤めをさせた奈美子に、更に、金策の相談をする。籠の鳥の奈美子に金策のつく筈がないので結局は

『鞍替へすれば、何とかなると思ひます』

と、唐山人の手にかゝつて、花柳界を轉々、たうとう二千圓の借金を背負つて、苦界に泣く身となつたのですが、それでも奈美子は銀次郎夫婦を恨みには思ひませんでした。

私と知るやうになりましたからは、凡てを打明けて相談してゐましたが

(お前を食ひ物にしてゐるお父さんやお母さんが憎くはないか。養女だからとは云へ、背負ひ切れないほどの借金を背負つて、毎日毎日、骨をけづるやうな思ひで働いてゐる娘を、これ以上虐めるなんて、お前の親は鬼だね、全く阿漕なものだ)

と云ひますと、奈美子は、涙を流して

「親の悪口だけは云はないで下さい。こんな社會に生活してゐると親に孝行するだけが、楽しみなんです。私は死ぬまで、骨を粉にして、親孝行する決心で居ります」と、云ひました。

その言葉が、私の魂をきゅーつとつかんでしまひ、私は奈美子を落籍する決心をしたのです。

花柳界育ち

苦界の女に似合はず眞面目である上に親孝行な點にぞつこん惚れてしまつた私は

(こんな女を、自分の女にしてしまつたら、自分のためにもなるだらう)

と、ここで、奈美子を落籍する決心をいたしました。

奈美子を呼んで、落籍の相談をすると

「まあ私を……」

と、奈美子は夢かと喜びました。そこで、抱主の秋田屋の方へ話をする

『有難う存じます。奈美子もどんなに喜ぶことでせう』

と、大いに乘氣になつて呉れました

「前借金は千八百圓程残つて居りますが、彼女の嬉しい門出ですから、私の方でも餞別をする
 とに致しまして、千五百圓で手を打ちませう』

と、讓歩して呉れました。

(千五百圓なら惜しくはない)

私は喜んで、彼女のために千五百圓を投げ出したのです。奈美子は完全に私のものになりました。
 然し、私には妻もあり、子供もありますので、奈美子を家へ連れて行く譯には行きません。矢張
 り日蔭の女で、おかなければなりません。

(どうだね、小じんまりした家でも借りてやらうか)

(いゝえ、私といたしましては、なまじ妾宅に居りますよりは、旅館の安い室でも借りて住んだ
 方がどの位いゝか知れません。當分下宿屋生活でもしてゐたいと思ひますが、如何でございませう
 か)

(それもさうだね、下宿屋住居なら、世間の口もうるさくないしお互にましだらう)
 話を定めて、奈美子は旅館の一室を借りて住むことになりました。

旅館と云ひましても、特に取計つて貰ひましたので、一日一圓で一切合切賄つて呉れるのです。

だから一軒持つよりは、遙に安上りでした。

私は暇ある毎に、奈美子の許へ通つて居りましたが、花柳界から下宿住居をするやうになつた奈
 美子は、次第々々にヒステリー性になり、四、五月後には手をやくやうになつてしまひました。

(私をいつまで、旅館なんぞにおくのです。世間の手前もありますから、早く、家に入れるなり
 手を切るなりして下さい)

奈美子はこんな事を云ひ出し、つひに、私の本宅まで押しかけて来るやうになりました。

男の愚痴

夕べに源氏を送り、朝に平家を迎へる浮河竹の生活をしてゐた奈美子は、生活的に悪い習慣が浸
 潤してゐたと云ひませうか、眞面目な生活に對して焦れてゐましたが急激な環境の變化が、つひに
 彼女をして、ヒステリーにしてみました。

「私は、あなたの迷惑にならぬ程度に、日蔭の女として満足して行きます。苦界の生活から自由
 な身體にして下すつたあなたのために私の一生は、どうなつてもいゝのです」
 自由な身體になつたことを、極度に感激してゐた奈美子が、次第々々にヒステリーとなり、一夜

行かなかつたと云つては、愚痴を云ひ、つひには

「私を放つておいて、どうする氣なんです。私は一人で生活することは出来ない女なんです、さあ一緒に来て下さい」

と、私の本宅まで押掛けて来ました。一切の秘密は、彼女の突然の登場によつて暴露しました。私の家庭は滅茶々々になつてしまひ私は二人の女の間立つて、苦しみました。

併し、妻にしる、奈美子にしる私自身に責任のある女です、私は固く決心して、

「今お前が騒いでは、自分が困るだけだ、奈美子は一寸の出来心から交際を結んだ女だし、お前は子供までなした自分の妻である。夫婦は一心同體と云ふ。夫の苦しみは妻の苦しみであり、夫の恥辱は妻の恥辱なんだ。

頼むからお前は、自分を責めないで呉れ、眼を閉ちて知らぬ顔をしてゐて貰ひたいのだよ」

と、妻の前に両手を突きました妻は私の言葉を諒解して呉れまして、

「私にはあなたの氣持が良く判ります。二十年間以上もつれ添つた仲ですもの、今更あなたに捨てられようなどとは思ひません。私はあなたを信じてゐますから奈美子さんの方も薄情なことをせず、あの人の身の立つやうにして上げて下さい」

と云ひました。私はこの時位、妻の心情に泣かされたことはありませんでした。

「こんな立派な妻を持つてゐながら、自分は何と云ふことをしたのだらう」

私は、奈美子との生活を恥かしく思ひ、彼女との関係を清算しようと思ひましたが、男女間の關係は、理窟通りには行きません。奈美子との關係を絶つことは、どうしても出来なかつたのです。

兩親の驚愕

「あなたは、私を捨てる氣なんでせう。死んだつて離すものですか。あなただつて一緒よ……」

奈美子は、私の胸倉を取つて、泣き喚きました。然も奈美子の邪推は一日一日嵩じて行き、到底普通常識で判断することは出来なくなりました。

『このまゝ進んで行つたら、どうなるだらうか』

私は自分の將來を考へるやうになりました。彼女は恐ろしい精神病者となり、つひに精神錯亂して私の胸を――

私は、奈美子によつて殺されさうな氣がしてなりません。来る日來る日も、云ひやうのい恐怖症にかられてゐましたが、私も、何だか病人のやうになつてしまつたのです。

奈美子も病氣だし、自分も不健康である。そこで

『暫らく、静養でもしたら、全快するかも知れない』

と、私は奈美子を連れて、旅行に出かけました。旅行に行けば、奈美子の気分も良くなるだらうと思つてゐたのが反対で奈美子の嫉妬にはホト／＼參つて了ひました。

『もう駄目だ、このまゝでは自分も自滅の他はないし、奈美子のために滅びる位なら……』

ふつと浮んだ殺意、私は奈美子を殺す決意を固めて了ひました。

恰度土浦の旅館に居る時でしたので

『これから大洗海岸にでも行かうか、見晴らしのいゝところだから身體にいゝと思ふが……』

と奈美子を伴つて、大洗海岸へ出かけました。

夕暮まで遊んでゐて、夜道を散歩してゐる中に、奈美子の油断を狙つて、手拭で彼女の首を絞めて、殺したのであります。懐中物から證據になるものは悉く抜き取つて來た積りでしたが、悪いことは出来ないものです。

何とも申譯がありませんでした。どうぞ、御存分に御處分下さいますやう……』

と、悔悟の涙を流しながら、懺悔した。

そこで警察では一件書類をまとめた上、検事局の指揮を仰いだが、検事局では彼の身柄を刑務所に收容し、豫審を経て、公判となつた。

さて、大洗海岸の美人殺し野口好榮は、いよ／＼斷罪されることになつたが、奈美子の死を知つた親元では

『それは大變だ……』

と驚愕した。

養親夫婦

秋田屋の主人は、野口の取調べ中に參考人として喚問され、奈美子と野口の關係について訊問されたので、逸早く、奈美子が野の口の手にかゝつて、敢へない最期を遂げたことを知つた。

流石に秋田屋の主人も、

『あの濃厚な人物が、自分の妾を殺害するなんて、これはたゞ事ではないぞ』

と打驚き、早速、奈美子の養親白河銀次郎に知らせた。

『えッ、奈美子が殺された？』

銀次郎は容易に信じなかつたが大洗海岸美人殺し事件を報道した新聞記事などを見せられて、

「だ、誰が殺したんだ、畜生！」

と怒り、スツカリ取亂してしまつた。銀次郎は奈美子の仕送りを受けて生活してゐたのだから、彼女が死んだことは、パンの道を絶たれたも同様である。

途方に暮れた銀次郎は、

(さうだ、お鐵の阿女にも知らせてやらねば……)

と、思つた。お鐵は銀次郎の妻で奈美子のためには養母に當つてゐるが、現在は事情あつて、別居生活をしてゐるのだつた。

お鐵に會つて、

「奈美子は殺されてしまつたよ、大洗海岸で首を締められて、殺されたんださうだ」

と教へると、お鐵も驚いて、

「まあ、あの娘が！」

と、ワツと泣きくづれた。

「畜生、一體誰が殺したんです、殺したのは誰です」

「それがね、困つた人が殺したんだよ、野口さんだ、野口さん……」

「まあ、野口さんが……」

お鐵も愕然としてしまつた。野口の事は、奈美子から聞いて知つてゐるので、銀次郎とお鐵も、啞然としてしまつたのだつた。

「然し、あの娘が居なくなると困ります。これから先どうしたらいいでせう」

「それが問題だよ、困るのはお前一人ぢやない」

二人は、顔見合せて啞然としたが、やがて銀次郎が乗出した。

「これは俺達だけで、相談してゐる時ぢやないよ。生みの親の榎本さんの方へも知らせてやらなければいかんね」

「なるほど、榎本さんだつて吃驚しますよ」

「二人で出かけよう、そして向ふで相談しようぢやないか」

「さうですね」

銀次郎とお鐵は、色を失つて榎本方へ飛んで行く。慌たゞしい二人の來訪を受けて、
「これはどうした騒ぎですね」

と、榎本が度膽を抜かれて叫んだ。

死花は咲く

奈美子の死を知らされた生みの親榎本も

『えッ、あの娘が……』

と、顔色變へて驚いた。

『それにしても、憎い奴は殺した野口だ、このまゝすます譯には行きません』

銀次郎が唸るやうに云ふと、榎本も大きく頷づいた。

『私はまあ、生みの親と云ふだけだが、白河さんやお鐵さんは永い間養育されたのだし、これから親のためになると云ふところを殺されたんだから、こいつは、野口の方で考へて貰はねばなりませんね談判したら如何です』

『さあ、談判すると云つても、相手の野口は刑務所に居ることだしどうにも手がつけれませんよ、困つてしまひましたね』

『私は法律の事は知らないけど、お上の力で、何とかして貰へるさうぢありませんか、損害賠償と

か云つてな』

『損害賠償——』

『汽車に轢かれた奴が、鐵道省を訴へて、大分貰つたとか云ふ話でしたよ』

『なるほど』

『心當りがありますか』

『私にもハッキリとは判りませんが、辯護士に相談して見ませう、辯護士に——』

『なるほど、では私も一緒に出かけませう』

辯護士に相談すると

『働きのある娘を殺されたのなら慰藉料の請求をしたらいい』

と、辯護士も乘氣になつてくれたので、銀次郎等は、奈美子が今後二十一年間生存するものとして一年間の損害千二十圓、廿一年間の損害の合計二萬千四百二十圓を慰藉料として請求した。

裁判所では銀次郎等と野口を呼出し、審理を進めたが、野口は奈美子を殺害した理由として

……奈美子は自分の將來を悲觀して、自殺を圖つたことがある或る時は投身自殺せんとして、消防手に救助された程で、自分が絞殺しなくとも、死んで行く女であつた。……

と、抗辯した。

裁判所では奈美子が、藝妓として一月百圓稼ぐものとして、十圓を檢番、四十五圓を主人、結髪費その他三十二圓で、純益十三圓と看做し

「被告人野口好榮は原告三名に對し、金各千五百圓宛を支拂ふべし……」
と、判決した。野口は殺人罪に問はれたばかりでなく、三人に對し合計四千五百圓を支拂ふことになつたが、金に換算された奈美子は向ふ廿一年間廻つた譯である。

不在證明

意外な陳述

公判開廷となると、中島判事は徐ろに、

「並島三藏！」

と呼んで、乗出した。

「くさ」

答へたのは、二十四、五歳位の若い被告だつた。久留米緋の袴を着て、胸のところに三二一號と襟番號が縫ひ付けてある。

「並島三藏だね」

「左様でございます」

「現住所は品川区大井町二、五二〇、年齢は二十四歳、職業は無いね」

「恐れ入ります」

三藏が、ベコリ、頭を下げると中島判事は、檢事席の中濱檢事を

「どうぞ」

と促した。

中濱檢事は法服の袖をさばいて席に起ち、

……被告人は昭和八年十月窃盜罪により東京區裁判所に於て懲役一年に處され、出所後、昭和十年四月十六日午後八時頃、川崎市幸町三〇先道路に於て、縁日見物中同じく見物中、の氏名不詳

の婦人のエブロン、ポケットから、現金一回七十錢在中の赤革製ガマロ一箇を窃取したものであります。

と、公訴事實を陳述する。中濱検事が著席すると、

「検事さんから述べられた公訴事實に就いて、何か云ふことがあるか、どうだね」

と、中島判事は被告の三藏に訊ねた。

三藏は突然

「判事さん」

と頭を上げ、キツバリした江戸辯で叫んだ。

「私は、警察や検事局では一切を認めて居りますが、實に、そのやうな事實はないのであります。警察や検事局では虚偽の陳述をしてゐたのでありまして、拘摸をした覚えはありません。私は無罪です」

「では、検事さんの云はれた事實は否認するんだね」

「左様です。私がおんな嘘を申し上げましたのは、刑事さんが！」

「よろしい。そんな事は後から訊ねる。否認するならばそれでいゝのだ」

「くす」

三藏が拘摸を働いた覚えがないと主張したので、公判廷は俄にざわめいた。

中島判事も一寸意外な面持をしたが、やがて、

「被告人、それでは訊ねるが……」

と、乗出した。

刑事への報恩

「然も、私は……」

と、興奮する三藏を

『もうよろしい。詳しい事はおひおひ聞くことにするから、その時に陳述しなす』

「は」

三藏が沈黙すると、中島判事は席に、乗出すやうにして

「被告人には前科があるか」

「ございます。昭和八年に拘摸で檢舉されまして、東京區裁判所で徴役一年の判決を言渡されま

したその後檢舉されたことはありません」

「服役を終つてから、何をしてゐたかね」

「料理屋の見習コックとなつて、働いて居りましたが、半年程前にやめまして、檢舉されるまで、何もしてゐません。」

ここで、中島判事は、一寸言葉^{ことば}を切つて、記録^{きろく}を讀んでゐたが、再び訊問^{しんもん}を開始^{かいし}する。

「昭和十年四月十六日午後八時三十分頃、川崎市中幸町三十番地先道路に開かれてゐる縁日に行つたかね」

「それが違ふのです。私は行きませんでした。」

「然し、警察や検事局では同夜縁日に行つて、夜店見物中の婦人のエプロンの中にあつた墓口を盗んだやうに云つてゐるが——」

「それは、嘘^{うそ}です。警察へ留置^{りゅうち}された私は、山下刑事^{けいじ}さんにはいろ／＼御世話になつて居ります。自分のやうな者でも檢舉^{けんぎよ}して、それが手柄になることなら、せめても御恩返し^{ごおんがへ}になると思つたのです。」

日頃御世話になつた山下刑事さんに、手柄をさせたい一心から、心にもない偽りを申上げたので

ひかします」

三藏の陳述が、餘りにも意外だつたので、中島判事も、きつとなつて、三藏を見た。三藏は眞剣な表情をして

「嘘を申上げたのに就いては、證據があります。中幸町の通りには縁日はないのでありまして、その有無をお取調べ下さいますれば、ハッキリすると思ひます。」

「ふーむ、それならば警察、検事局までハッキリ、喋ることはないではないか。出鱈目^{でたらめ}にしては念が入りすぎてゐるし、當局に出鱈目をいふなんて、怪しからんではないか」

「何とも申譯がありません。然し警察では、そんなに云はなければならなくなつたのです。検事局では、警察で云つたことと違つてはいけないと思つて、申上げたのです」

刑事の證言

三藏が、中幸町の通りには縁日が出ないと、強硬に主張したので法廷は急に、雲行が險惡になつてきた。中島判事も不審に思つて三藏の顔を、まぢ／＼と見詰めてゐたが、顔色一つ變へず判事の訊問を待つてゐる彼を見ると

(なるほど……)

と云つた態度で、記録に視線を落した。

『では聞くが、その夜、中幸町の縁日に行かなかつたとすれば、何處に行つたかね、行つた先は何處かね。』

『は、その夜は大井の喫茶店に行つて遊んで居りました。翌日大井町一帯の大掃除を手傳ふことにして遊んでゐたのです。お上さんを呼んで戴けば、直ぐに判ると思ひます』

『なるほど……』

中島判事は、尤もらしく傾いた。三藏が警察、検事局の供述を翻へして、

『検事の公訴事實は、正に事實無根である』

と主張したので、法廷の勢形は一轉し、事實審理が終了となる。

そこで、三藏が、

『日頃御世話になつてゐる刑事さんに、手柄をさせたいために、あんな出鱈目を認めたのです』と云つた問題の人、山下刑事を喚問した。

證人として法廷した山下刑事は、中島判事から、

『こゝに居る並島三藏を知つてゐるか』

『知つて居ります』

『どんな關係で知つてゐるか』

『並島は、刑務所を出まして後、二、三回檢學したことがありましたので、そんな關係から知つてゐるのであります』

『昭和十年四月十六日夜、拘摸犯人として檢學してゐるが、それに相違ないか』

『相違ありません』

『送局した理由は……』

『並島の自白であります』

『並島を訊問した處、中幸町の通りには縁日はないと云つてゐるがこの點はどうか』

『さあ、その點はハッキリ致しませんが……何しろ、並島の自白に基いて送局したものですから……』

山下刑事の答辯は極めて、曖昧だつたので、法廷の情景は、いよいよ面白くなつて來た。

マダムの登場

刑事の證言が曖昧だつたので、公判の形勢はいよく被告人並島三藏に有利になつて來た。で、中幸町の通りに縁日が出るか、どうかを調査して見ると、縁日は出てゐないことが判明したし、三藏の無罪はほぼ決定的なものとなつた。残るところは、被告人の三藏が、當夜何處にゐたか、即ち中幸町の通りを歩いてなかつたといふ點がハッキリすればいい譯である。

そこで、中島判事は大井町の喫茶店のマダム伊藤はるサンを喚問した。宣誓をした後中島判事が

『この男を知つてゐるか』

と、三藏を指差すと

『手前共の店へ遊びに見えるお客さんで、よく存じて居ります』

と、云つた。中島判事は直ちに、事件當夜の件に關し訊問する

『昨年四月十六日午後八時頃、この男は店にゐたか』

『さあ、四月十六日の晩にいらしたか、どうかハッキリしません、兎に角毎晩のやうに見えたやうです』

『何でも、翌日の十七日に大井町一帯の大掃除があるので、その大掃除を手傳ふ約束をして遊んでゐたと、この男は云つてゐるのだが……』

『はあ、それはございました。その晩は夕方から見えて、閉店になるまで、遊んでいらつしたと思ひます』

『日時は、思ひ出せないね』

『何しろ、昔のことでございますので……』

『よろしい、御苦勞でした』

はるさんは、町寧にお辭儀をして、退廷する。被告席に差控へてゐた三藏は、ほつとして顔を上げたが、これで不在證明が成立したとは云へない。三藏が十六日の晩に喫茶店にゐたと云ふ適確な證明がないのだ。

公判閉廷の後、中島判事は後藤書記に命じ、昭和十年年度の春季清潔施行日時を、品川區役所に照會した。數日の後品川區役所から通知があつたが、それには……。

無罪の判決

品川區役所から東京區裁判所中島判事宛に送達された返信には、大井町附近の春季清潔検査は、四月十七日施行された旨認められてあつた。

十七日と云へば、三藏が伊藤はるさんの經營する喫茶店で

『明日の大掃除を手傳つて上げませう』

『え、女許りだから是非、お願いするわ』

と、夕方から夜おそくまで遊んでゐた翌日であり、更に三藏が拘摸を働いた翌日にもなつてゐるのである。

明日大掃除と云ふ晩に、遊んでゐたと云ふのだし、その晩が犯行當夜の十六日午後八時頃といふのだから、三藏の主張する不在證明は成立したわけである。

ここで一言して置きたいのは三藏のために、墓口を拘られた被害者であるが、檢事の公訴事實に現れた。

『夜店見物中の婦人……』

なる人物は、警察に對して被害届をしてゐないし、何處の何といふ女か判明してゐない。

『お前は、夜店見物中の婦人エプロンのポケットから墓口を拘つただらう』

『く、確に拘りました。何とも申譯のないことで……』

『さうか。今度はまあ税金だと思つてつとめて來るんだね』

『く』

この位のこと、警察の取調べが終り、一件書類作成の上送局となつたもので從來これを通つてゐるのだ。

常習的拘摸は税金だと思つて神妙に判決を受けて、服罪して行くが三藏は公判で

『それは違ひます』

と寢返つた。三藏の自白だけで公判を請求したのだから、彼のためには誠に有利千萬であつたが三藏を檢舉送局した山下刑事の面目は丸潰れとなつた。

立會の中濱檢事は

……被告人の當公判廷に於ける陳述は、信用するに足りぬ虚構の事實である。被告人には既に、拘摸の前科があるし出獄後も拘摸犯人として檢舉されたことがあるのであつて、被告人を拘摸常習者と見るのに、何の躊躇もない。……

と論告懲役一年を求刑、辯護人堀合正男氏は完全なる不在證明を楯に無罪を主張した。

裁く人中島判事も、辯護士の主張を容れ

「被告人並島三藏は無罪！」

と判決したが、拘摸犯人の不在証明が成立して無罪となつた例は珍しい。

夜櫻 お小夜

釋放の日

廿九日の拘留を終へたお小夜が、警察を釋放されると、その裏門のところに、彼女の出て来るのを待つてゐる人があつた。

紺の單衣にセルの袴をはき、鼠色のソフトを冠つた四十近い、品のいゝ人物で、お小夜が風呂敷包みをかゝへて出て来ると

「おゝ出て来たか」

と、彼女のそばに寄つて行つた。

お小夜はギクリとして、相手の顔をまじく見詰めて一向に見覚えがないと云つた顔付をした。

「儂ぢやく。交番の野田巡查ぢやく、制服を著とらんから、見違へたんだらう。はは……」
男の笑顔を見て、お小夜も漸く思ひ出した。

「色々御手数をかけまして、申譯ございません」

「いや。それよりか、若いお前を檢舉して、本署へ連行したが氣になつてのう。

何とかして助けたいと思つてゐたが、板の間の現行犯では仕方がなかつた。送局にならずに、拘留處分ですむと云ふことだつたのでやれ。と思つてゐたところだつた。

これから先が大切だから間違ひのないやうにしなければいかん、いゝかね」

「はい、今度は二度と、こんな不心得は致しません」

「で、これからどうするんだね、お前にはたしか、両親がなかつた筈だが……」

「……………」

「その事で、相談して上げようと思つてゐた。若し、眞面目にやるなら、儂の知合ひの工場で使つて見ようといふ話だが、女工でもして働く氣はないか。

女給かなんかのやうな派手な仕事の方がいゝかね』

『いゝえ、私は工場の女工になつて働きます。』

これからは、必ず眞面目な女になりますから、どうか、お願い申します』

『よし、兎に角、行くところが無いのなら、儂の家まで來なさい。お湯にでも入つて、まづ打寛いでのことだ』

『いろ／＼と御世話さまで、お禮の申上げやうもありません』

『もういゝ／＼。ペコ／＼するとみつともないよ、早く歩きなさい』

『はい』

一時は、夜櫻お小夜と異名を取つたお小夜も、今は見違へるやうな神妙さで、野田巡査の後から歩いて行つた。

彼女は今は女盛りの二十一歳の美人だつた。

女工生活

野田巡査の家に同道されたお小夜は、野田巡査一家の好意で長い間の拘留生活の垢を落とし、漸く

人間らしい氣持になつて、數日を過した。

『さあ、お前の都合さへよかつたら、工場へ行つて見ようぢやないか』

彼女が、元氣を取戻したのを見て、野田巡査が云ふ。お小夜も、いつまでもいつまでも厄介になつてゐる氣はないので、スツカリ、その氣になつてゐた。

『では、お願い申します』

『出掛けよう、支度はいゝかね』

『はい』

別に支度をするほどの事もないし、お小夜は野田巡査に連れられて、本所の工場へ行つた。

かねて、野田巡査から話があつたと見えて、工場主の吉田さんは、ニコ／＼顔で

『あゝ何時かの人と云ふのは、この娘さんですか、なか／＼立派な娘さんぢやありませんか』と、愛想よく迎へてくれた。

『お願い出來ませうか』

『えゝもう、私の方は差支へありませんが、こんな立派な娘さんでは、女工には勿體ないと思つて、此方の氣がひけますよ』

「冗談を——。お小夜も、一生懸命に働く気でゐますから、明日からでもお願い申します」

「承知いたしました」

お小夜は、日給八十錢を貰つてこの工場で働くことになった。いよく翌日になると、夜櫻お小夜と仇名の不良少女も、油臭い工場に出勤して、眞面目に働いた。

工場主の吉田さんも大いに喜んでお小夜お小夜と可愛がつてくれる。お小夜も働き甲斐があつた。その中、工場主吉田さんの好意でお小夜は、野田巡査宅を出て、お鈴と云ふ仲間の女工と共同生活をする事になつた。

お小夜は、かうして、ヤクザな世界から足を洗ひ、堅氣な女として洗練されて行つたが、彼女も既に二十歳の春を過ぎてゐる。

殊に、身寄り、頼りのないお小夜は、センチで、早熟であつたので、一人へ生活することは、何よりも辛いことであつた。

悶々として、青春の躍動に惱みつけてゐるところへ、吉田工場に働く中川清之助と云ふ男工が、お小夜の容貌に眼をつけて、云ひ寄つて來た。

男の秘密

男工中川清之助と、二世を契つたお小夜は、清之助との逢ふ瀬を楽しみに、愉快なその日／＼を送つてゐたが、ある日、工場の隅で清之助と女工のお照が、睦まじさうに語り合つてゐるのを發見した。

ムラ／＼と嫉妬心が燃えさかつて來たので、お小夜は、二人の背後に忍び寄つて、聞き耳をたてた。

清之助が、困惑し切つた顔付でお照の肩に手をかけながら

『そんな譯で、どうしても五十圓だけ必要なんだ。月末になつたら拂ふから、お前の手で、都合して呉れないか』

『ええ。直ぐ返事は出來ないけれど、兎に角お父さんに相談してみるわ』

『あゝ頼むよ。眞實に困つてゐるんだから……』

『何とかして見るわ、それから、今夜會つてくれる？』

『返事も聞きたいし、日進館で會ふことにしようか』

「え、割引から行くわ、では、晩にネ」

お照が行つてしまふ。清之助は

『これでいゝ〜』

と呟きながら、これも、職場へと行つてしまつた。

(あの人は、お照さんとも出来てゐるらしいが、酷い男だ)

お小夜は、云ひ知れぬ憤怒に、ちつとしてゐることの出来ない衝動にかり立てられたが

(こんな所で、詰問して見ても始まらないし……)

と、ちつと我慢した。

工場が終つて、家路に著く時、清之助の下宿へ立寄つて見た。清之助は錢湯へ行つて留守だつたので、座敷へ上つて待つてゐると、程なく、清之助が歸つて來た。

『おや、來てゐたのか』

清之助は、何氣なく云つて

『飯はまだだらう、一緒に食べに行かうか』

と、誘つたが、お小夜はカツとなりながら

『貴方は、お照さんと、どんな仲なんですか。それをハッキリ教へて下さい』
と、詰め寄つた。

『はつは——、どうしたんだネ。突然、變な事を云ひ出したりして——』

『シラを切つたつて駄目、私はちやんと見てゐました、今夜お照さんと、活動で會ふのでせう』

『えッ、そんな事を——』

『え、知つてゐます、聞いてゐました』

『さうか、ぢやあ譯を話すことにしよう、さあ〜落付いて、聞いて呉れ』

清之助はお小夜の肩をおさへて無理に、坐らせた。

女の意地

お小夜が、どうにかかうにか冷静になるのを待つて

『お照には、五十圓の金策を頼んだんだよ。お照の両親は知つてゐるのだが、金の事になると、頼み辛いのでネ。

別に關係があるの怪しいのと云ふ間柄ではないのだ!』

と、辯解した。

『それが本當だとしたら、私にだつて、相談してもいゝぢやありませんか』

『それも理窟さ、併し、自分の可愛い女に、金の相談なぞしたくないのでネ』

『でも、そんな時の相談相手になつてこそ、戀人同士ぢやありませんか。』

秘密な話は、他の女にして、いい話だけしかないなんて、餘り他人行儀過ぎると思ふわ』

『判つたよ〜。これから先は、何でも彼でも、包まず相談することにするよ』

『五十圓ですネ。何時までに必要なんですか』

『何時までと云ふことはないが、なるだけ早く、要るんだよ』

『ようございます。私が何とかします』

『いゝよ〜。今度はお照の方で都合して呉れるから……』

『いやです。そんな女の金、返して下さい』

『困るなあ。そんなにムキになる事はないのに——』

『私だつて、五十圓位の金は調達出来るのよ。』

身體を賣つたつて五十圓位にはなりませんよ』

『それほどの問題でも無いぢやないか』

『もういゝです。必ず、五十圓の金は調達致します』

お小夜は、顔を眞紅に染めて興奮しながら、歸つて行つた。

『はつは〜。甘いもんだな——』

お小夜の去つて行く足音を聞きながら、清之助はニヤリした。

それから、おめかしをして、午後七時の割引前に、本所區太平町の日進館へ、ブラ〜歩いて行

つた。日進館は、大都キネマの封切館で、松山宗三郎主演の時代劇がかゝつてゐた。

割引を狙つてゐる人々が、館の前に列を作つてゐたが、清之助はお照の姿を探すために、わざと、

繪看板を見たりしてゐた。

チリン〜、割引時間を知らせる鈴が鳴り出した。ぞろ〜列を作つた人々が入場して行く。

そこへ、お照が急ぎ足にやつて來たので、清之助は、二人分の切符を買つて

『お照ちゃん！』

彼は、笑顔で、彼女を迎へた。

吸血鬼

四四

日進館に入場すると、清之助は直ぐに

「晝間の話、どうだつた？」

と、催促した。お照は、懐中から財布を出しながら

「お父さんに話をしたら、今都合が悪いから、月末ではどうだ——と云つたわ。仕方が無いから、私自分で調達しました。ホラ五十圓受取つて頂戴！」

「すまないね、お照さんにそんな事をして貰つては——」

「いゝの、兎に角取つておいて頂戴、貴方が困る時は、私が力になるし、私が困る時は、貴方に頼りになつて、戴かねばなりませんもの……」

「有難う、僕は今ほど、女の親切を、シミ／＼感じたことはない、持つべきものは、何と云つても、戀人だね」

「まあ、大變な感心の仕方ね、それはね、山内一豊の妻ほどには行かなくても、自分の愛人のために一身を犠牲にする位の覺悟は、誰にだつてあつてよ」

お照が笑つたので、清之助も誘ひ込まれるやうに微笑した。

五十圓の金をお照から受取つた清之助は、急に、浮き／＼しながら映畫を観た。閉館になつてか

ら

「一寸、その邊を歩かない？」

と、云ふお照に、

「今夜は駄目だ。下宿へ田舎の知人が待つてゐる筈だから——」

と、體よく斷り

「それでは、明日ネ」

と、お照も止むなく、別れて行つた。

「はつは——、ローつで五十圓か色男には生れて來るものだ」

清之助は五十圓を押し戴きながら、下宿へ歸つたが、一方清之助に夢中になつてゐたお小夜は

(何とかして、五十圓都合しなければ……)

と、心を碎いたが、彼女の身に取つて、五十圓は大金だ。野田巡査に相談したら、力になつて貰へはすまいかと思つて、野田巡査宅を訪問したが

四五

「眞面目に働いてくれると云つて工場の方でも喜んでゐたよ、この上は、立派なお媚さんを貰ふことだと、家内と二人で、毎日々々噂してゐたところだ、身體はどうだネ。元氣かい」と、優しく云はれると、嬉しさ有難さが先で、金の無心なぞする氣になれなかつた。

微笑む者

野田巡査宅を出たお小夜は、

(どうにかして金策せねば！)

と、街へ出て行つたが、金の調達をするアテはなかつた。

その中に、何の意識もなく、吉田工場主の家の前へ来てしまつてゐたお小夜は、

(おやッ、社長さんの家だ！)

と思ふと、ハツとして、立ちどまつた。

が、吉田工場主に、一切の経緯を打明けて、金策する氣にはなれなかつたし、暫らく、どうしたものかと躊躇してゐる間に、持前の悪心がぐんぐん頭をもたげて來た。

『えゝやつてしまへ！』

西園の様子を見ると、一人通つてゐないし、工場主の家はシーンとしてゐる。

お小夜は、來訪者を装つて、工場主宅に入つて行つたが、家は開け放したまゝ留守だつたので、そのまま奥座敷へ上つて行つた。

家人が三人、ラヂオを掛けたまま、眠つてゐるので、屹驚したお小夜は、座敷の隅に置いてあつた女物の錦紗織を引摺んで、戸外へ飛出した。

(僅か、數箇月の事だけど、私と云ふ女も、空ツきし、意氣地が無くなつたネ)

自嘲したお小夜は、手にしてゐた羽織の裏を返し

「これでも、いくらかになるだらう」と、その羽織を入質した。

頑張つて見たが、十圓しか出して呉れなかつたので、

(兎に角、十圓だけでも渡したらあの人も、安心するだらう)

と、清之助を訪ねた。清之助は酔ッ拂つてゐたが、彼女の姿を見ると、

「今頃、何しに來た？」

と、半は不審がり、半は喜んで、彼女の身體を抱いたりした。

「明日になれば、全部調達出来るけど、今夜は十圓だけしか、都合出来なかつたの、これだけで

も、取つておいて下さう』

お小夜は、清之助に十圓札を渡した。清之助は大喜びだった。

『おそいから、今夜は泊つてお行き——』

清之助が云ふ。お小夜はその言葉が何よりも嬉しかった。彼女は清之助の云ふまゝに、そこに一夜を明し、翌日になると、再び昔に還つて、悪事を働き、清之助に貢いでゐた。悪の榮えた例なく、彼女は又もや逮捕されたが、清之助はお小夜やお照から捲上げた金で新しい戀人を探しながら飲み廻つてゐる。

弱者同士

プロローグ

花の霧島

煙草は國分

燃えてあがるは

オハラハ 櫻島

相當以上に使つたレコードを掛けながら、ツラリとならんだ女給達が、金屬性の聲を張上げて、合唱してゐる。

斷髪もゐるし、島田も、束髪もゐる。若い女も、中年の女も、一様に濃い化粧をして、何れも、海千山千の渡り者らしい顔をしてゐるのが、場末のカフェーらしくて如何にも頽廢し切つてゐるのだ

『おや、皆で唄の稽古かい。止してお呉れよ、ここは學校ぢやないんだからね』

錢湯から歸つて來たマダムが、湯上りの、蒸せるやうな匂ひをぶん／＼させながら、不平らしく吐き出すと、女給達は、

『ふん』

と、鼻で笑つて、レコードの側をはなれて行つた。

めつきり、寂れて來たこの場末のカフェーも、以前は、客止めするほどの繁昌をしたことがあつ

たので、マダムは、

(カフェーの寂れるのは、女給達のサーヴィスが悪いからだ。それに、評判になるほど、綺麗な顔をした女給もゐない……)

と、店の不景氣を、女給達のセキにしてゐた。

で、なにかと云ふと、マダムの不平が、女給達の頭上で爆發するのだ。

「ね、みんな、妾は決して、不平を云ふ譯ぢやないけど、もう少し、何とかならないものかね。

このまゝで行つたら、このカフェーの將來も、眼に見えてゐるやうなもんだよ」

マダムは、ジロリと女給達一同を見廻した。どの女給もどの女給も、マダムの言葉に、別段興味を持つてゐないらしい。マダムはイライラしながら、女給達に向つて云つた。

「唄ばかり稽古しないで、少しは店のために働いたら、どうなんだい。少しは、妾のためにもなつてお呉れ。

女手一つでやつてゐるんだからと思つて、皆で、妾を馬鹿にしてゐるんだらう。妾はちゃんと知つてゐるよ。

でなかつたら、エロサーヴィスでも何でも、お客さんが満足してワツシヨイ〜来るやうにした

らどうなんだい』

マダムは、泣き出しさうな顔をしてゐた。

「あゝ、いやだ〜」

女給の一人——お鈴が吐き出し、

女給の希望

お鈴に、溜息をつかれると

「お前達は、妾を馬鹿にしてゐるんだ。雇人の癖に、主人を馬鹿にするなんて……」

と、マダムはヒステリカルに叫んで、奥に去つてしまつた。

「ふん、全くやり切れないよ」

お鈴は、捨鉢に云つた。彼女がこんな性格になつたについては譯がある。

以前は、大會社の技師長の妻として、幸福な生活を送つて來た。子供が出來ると聞もなく、或る事情で、夫の技師長は自殺を遂げてしまつたため、彼女は乳呑み兒を抱へて、若後家生活に入つたのである。

初めの間は、夫の残した財産もあつたしするので、まあ、生活に不自由を感じるやうなことはなかつたが、子供が病氣に罹つたり、自分でも臥床したりしたために、その財産も、大半は使つてしまつた。そこで

『こんな事をしてゐたのでは、将来が案ぜられる』

と氣が付いて、働きに出る決心をしたが、女事務員に使つてくれるところはなし、女店員には年が多いし、仕方がなくなつて、カフェーへ働くやうなことになつてしまつた。

いざ勤めて見ると、銀座のカフェーの女給達は、旦那持か人妻で獨身婦人の働き場所が無いやうな氣がした。

自分に適した働き場所を探さうとしたのが間違ひの因で、たうとう、舊郊外地のカフェーへ辿りついてしまつた。

ここまで来ると、死んだ夫に対する義理だの、祖先以來の道德だの——と云つたものに、こだはつて居られなくなつた。

(このまゝでは、女一人で生活して行くことは困難だし、適當な相手があつたら、世帯を持つて女らしい生活がしたい)

お鈴は、急に、結婚したい氣持にまでなつてゐた。

そこへ、まるで作り事か、芝居のやうに、澤村一郎と云ふ男が現れて來た。

三十歳に近い青年だが、現代的なモダンボーイで、獨身青年の癖に

『處女でなければ、結婚することは出來ない。妻に迎へる女は、飽迄清純な處女でなければならぬ』

と云ふやうな、難しいことは絶対に云はなかつた。それが氣に入つて、お鈴とは、めつぼうに氣が合つた。

女の心

ある夜、澤村はお鈴を相手に飯んだ揚句

『お鈴さん、僕は眞面目な話があつて來ただけど笑はないで、聽いて貰へるだらうか』

と、急に、眞剣な表情になつたので、お鈴は

(又か)

と、今迄の好感が、一度に吹飛んだやうな失望を感じた。

普通のカフェーのお客のやうにこの男も、愛してゐるとか、夫婦にならないかのと、彼女に云ひ寄つてくるんだと思ふと、軽べつしたい氣持にさへなるのだ。

「妾に話があるつて、一體どんな話なのさ」

こみ上げてくる不快なものを、ぢつと我慢して、聞き手になつてやると、澤村は、膝を乗出した。「こんな事を云ふと、きつと笑はれると思ふのですが、云はねば、僕が氣違ひになりさうなんです。ねえお鈴さん、僕と結婚の約束をしてくれませんか」

「ほほ、何の話かと思つたらそんな話なの、妾は御覽の通りの女ですし、そんな話なら、もつと初心な、若い娘にするもんよ、お門違ひで、何だか氣の毒みたいだけど……」
とう／＼月並の、軟派屋のやうなことを云ひ出したと思つてゐると、澤村は、いよ／＼熱心になつて來た。

「さう云はれると一言もありませんが、初心な娘と結婚する位なら初心から、貴女などに好意は持ちません。僕は、苦勞しつくした女なら、年増だらうが、醜い顔だらうがいゝと思つたのです、貴女は若い上に、美人だ、普通の男だつて魅惑されてしまふ、その貴女に僕がこんな氣持になるのは、當然のことだと思ひます」

「どうして——」

「僕が苦勞して來たからです。僕のやうに苦勞して來た男は、初心な、世間知らずの女と結婚しても不幸です」

「さうね……」

「僕は、自分を犠牲にして、弟のために働きました。弟のために學費を稼ぎました。その結果、弟は來年三月、早稻田大學を卒業するのです。僕の苦勞も、來年の春で終りになるのです。だから、來年になつたら結婚したいと思つて、相手を探しました甲斐があつて、貴女を知つたのです、どうか婚約して下さい」

「……………」

弟を大學に通はせたと云ふ兄らしい心に感動して、お鈴は、うなづいてしまった。

幸から不幸へ

弟を早稻田大學に學ばしてゐると聞いて、お鈴は急に澤村といふ男を見直した。

「妾といふ女は瑕物よ、子供もあるのよ、それでもいゝの、後悔しなくつて？」

『しません、嫁に行つたり、子供があつたりすれば、結婚生活については試験済みですし、安心が出来ますよ』

『貴女はよく理解して下さるのね妾はつくづく感服しちまつたわ、澤村さん本當に有り難ふ、感謝してよ』

こうして二人の間は急速に結ばれていった。

本郷動坂のお鈴の住居は、簡単なアパートで光信と呼ぶ七才になつたばかりの子供と二人で暮してゐるのだつた。

お鈴のアパートを訪れた澤村は或夜、子供の光信を真中にして、三人楽しく夢路に入つたが、翌朝になるとお鈴の態度はスツカリ人妻になり切つてゐた。

『——坊やと遊びながら少しの間留守番してゐて下すつてもいゝでせう——三人で食つて行く位は今のカフェーで働いてたつて平氣よ、それに五百やその位の用意はしてゐるし、ビク／＼したもんぢやないわ』

『どうか』

澤村の眼は五百と聞いた瞬間異様に輝いた、

數日過ぎると、カフェーから歸つて來たお鈴の前へ、澤村は蒼い顔をして現はれた。

『どうしたの顔色が悪いぢやないの』

『病氣ではないのだが心配なことがあつてね』

『まあ一人で考へてゐないで云つて御覽なさいよ、女の妾でも、少しは力になれますわ』

『有難ふ！ 實は弟の奴が怪我をしましてしまったんだ、入院させねばならぬさうだが、先立つものが、なくてね』

『大變だわ、金がないなんて言つて居れる場合ぢやないし、これを持つて行つて下さい』

澤村はお鈴の手から六百圓近くある預金通帳と印鑑を受取ると暗夜の街へ飛出した。

六百圓近くも預金のある通帳を持つたまゝその夜澤村は歸つて來ないので、

(一杯食つたか知ら)

とチリ／＼してゐると、翌朝になつて、澤村から速達が來た。

『弟の病氣が悪化したから、二、三日歸れないから、その積りでゐて呉れ——』

と云ふ意味のことが認めてあつて住所は書いてなかつた。半信半疑でゐる所へ、二日目の晩になつて、澤村は泥酔して歸つて來た。

「すまない全く申譯のないことをしてしまつたよ、弟の容體が悪いために、あの金を一時拜借してしまつたんだ」

『それなのにお酒なんか飲んでるなんて、ずるぶん酷いぢやないの』

お鈴はムツとして、澤村に突掛つたが、澤村は

『餘り申譯がないので、歸りにくかつたのだよ、酒でも飲んで、元氣をつけてから歸宅しようと思つてね』

お鈴はこれには一言もなく沈黙してしまつた。それから數日の後だつた、お鈴が店から歸ると子供一人で眠つてゐた。

『お父さんはどうしたの？』

『出かけたよ』

『出かけた？』

いよ／＼不審に思つたお鈴が、箆笥たんすの抽斗ひきだしを開けてみると、既に衣類は持ち出され、おまけに時計や指輪まで紛失してゐた。

『畜生！ 矢つ張りさうか』

お鈴は唇を噛んで、口惜しがつたが餘りのことに、涙も出なかつた。

澤村はそれツ切り歸つて來なかつた。

自分にも非があると思つたが、それにしても此のまゝ黙つてゐることは出來ない。お鈴は恥を忍んで警察へ訴へ出たが、澤村はお鈴を騙したと同じ様な罪で、すでに檢擧されてゐた。

間もなく結局詐欺漢澤村に對しては懲役一年六月の判決が下つたが、お鈴は傷付いた心を抱いて、相變らず女給暮しをつゞけてゐる。

昭和十一年六月十八日 印刷
昭和十一年六月廿一日 發行

版權所有

罪を裁かれる人々

定價十錢
(送料二錢)

著者

國民新聞社 編

發行者

東京市麴町區有樂町二ノ二 森田益雄

印刷者

東京市芝區濱松町三ノ五 松本營亮

發行所

東京市麴町區有樂町二ノ二 森田書房
電話銀座(57)二五二三番
振替東京九九二一四番

中部配給所

愛知縣寶飯郡豐川町知通十 森田書房 中部支店

西部配給所

大阪府豊中町櫻塚一、一〇七 森田書房 西部支店

北部配給所

新潟縣三條市田島三三四 森田書房 北部支店

京阪神特約店

大阪市北區堂島上二ノ二五 新正堂書店

〔特約〕 東京鐵道局公認 (鐵道保養會・鐵道弘濟會・鐵道授産會)

各驛書店・ホムスドン・街頭新聞スドン・有名書店にあり

終

新のみよも雑誌

新のみよも雑誌

話の王国

金十銭

郵税二銭

読み落しのない無駄のない雑誌、これが話の王国の編輯方針です。高価な三百頁も五百頁もの雑誌には自分の読み度くない部分が必要多少はあるものです。これは讀者諸君にとつては誠に無駄な費用と云ふものです。こゝに創刊號の大好評に力を得て、皆様の御期待にそむかない様確たる自信のもとに、第二號第三號と躍進又躍進！話の王国大進軍を開始しました。

全國驛賣店、ホームスタンド、有名書店にて販賣して居ります。せいよく御愛讀の程御願ひ申し上げます。

一 所 行 發 一

東京市麹町区 話の王国社 振替 東京 三ノ二町 振替 八八八 三四

★新のみよも雑誌★新のみよも雑誌★新のみよも雑誌★